

「固有種ニホンイシガメの保全」に参加して

長野市立湯谷小学校 磯尾 智子

1 参加の動機と調査内容

以前から、環境教育について実践を通して子どもたちと共に学んでいくことが大切であると考えていた。担任していた5年生の中に「わたしたちの生活と環境」という社会科の単元があり、教師自らが環境保全活動を行い、子どもたちにも環境保全について考えて欲しいと思い、参加をさせていただくこととなった。

調査地は、千葉県君津市、固有種であるニホンイシガメとクサガメが同所的に生息している調査地であった。ここでは、河川に新しい橋を渡すため河床を一部掘削し護岸された他に、水田を分割するように道路の建設が始まり、こういった人為的な環境の改変が、淡水性カメ類にどういった影響を与えるのか、その影響を明らかにすることを目的とする。

人的な環境の改変や外来種の侵入による影響で、淡水性カメ類は個体数が減っていると指摘されているが、過去の生息数に関する知見は乏しい状況である。これらの調査は、今後のカメならびに水田や河川周辺部を利用する生物の生息環境を保全するための基礎資料のひとつとなるということで、責任感をもちながらも、直に生き物と関わることで、環境の保全を図ること微力ながらも貢献できた有意義な調査となった。



2 授業での紹介

5年生の社会科「わたしたちの生活と環境」の単元において、子どもたちは、公害が国民の健康や生活環境に及ぼす影響や、公害の防止や生活環境の改善などのための人々の努力などについて調べ、公害を防止することが大切であることを理解する。

そして、森林資源の働き及び自然災害の防止と国民生活との関わりについて調べ、森林が国土の保全などのために重要な役割を果たしていることや、日本の国土の特色と自然災害との関係、自然災害による被害を防止するための国や自治体の取り組み、減災のための自助・共助の大切さについて学び、国土の環境が人々の生活や産業と密接な関連をもっていることを考えるようにすることがねらいである。

この学習において、今回の調査についての紹介をした。

調査地で、研究者の小菅 康弘先生、小林 頼太先生からいただいた資料を使わせていただき、「ニホンイシガメとは?」「調査活動の役割」「環境が与える影響」「ネットワークの大切さ」などの説明をした。また、調査の様子や生物について、写真を見せて紹介をした。



3 子どもの反応

今回の授業では、以下の4点について感想を書いた子どもが多かった。

- ①自然には色々な生物いるということ。
- ②自分たちの知らない所で、地道な調査をしている研究者や ボランティアの方たちがいるということ。
- ③環境を保全していくためには、多くの方々の知恵と努力が必要であるということ。
- ④研究者が地域の方たちと連携しあって活動することが大切であるということ。

また、何人かの子どもたちが「自分たちにもできることはないか」「総合的な学習の時間で、環境保全をやってみたい」などという思いを持った。環境に積極的に働きかけ、生活環境や地球環境を構成する一員として、環境に対する人間の責任や役割を理解し、積極的に働きかけをしていきたいという子どもたちの思いや願いを、授業を通して感じる事ができたことがうれしく思った。

4 これからの実践

小学校段階においては、体験活動が学びの土台・出発点となることが多く、体験活動は、子どもたちの学びと成長の過程全体において重要なものと考えている。環境教育においても、子どもたちの身近な問題から体験を通して学習していくことは、自分と環境問題との関係を考え、自分にできることから環境保全に取り組んでいこうとする意欲や態度を育てるために有効である。

「今後、学校内外を通じて多様な体験活動を充実させることを、一層重視していきたい」と、今回の調査参加を通して強く思った。貴重な学びの機会をいただいたことに感謝しながら、今後の実践に活かしていきたい。

5 自身の体験を語ることによる子どもたちの学びへの影響について

変化の激しいこの現代社会において、よりよい学び手を育てるためには、教師自らがよい学び手である「学び続ける教師」になる必要があると常々考えている。

今回、イシガメの調査に参加することで、環境保全について多くの学びを得ることができた。自分が体験し、学んだことを子どもたちに伝えることで、子どもたちは、環境保全についてより身近に感じてくれたと思う。そのことにより、「自分にもできることはあるのではないか」「自分もやってみたい」という思いをもつことができた。

教師自身が自分の内面を省察し、自己を改善していくためにも、教師自らが学ぶ機会をいただけたことは、本当にありがたいことである。

今後、今回の調査で得た学びを、子どもたちとの学習に活かしていきたい。